アナトール・フランスの「少年時代の思い出」

――本と子供について――

加藤林太郎

一

『鳥料理レーヌ・ペドーク亭』の中で、秘法研究家の哲学者ダスタラック氏の図書室へ勤めることとなったジェローム・コワニャール師は、その新しい職場に満足して云っている。「これほど私の望みに適った、愉快なすまいはまたとありません。ウェルギリウスが描いた楽土シャンゼリゼーでも、とてもかなうものではありません(1)。」アナトール・フランスの作中人物のこれは少しも例外ではない。本を手にして現れそうな人物はいくらでもいるし、学者シルヴェストル・ボナールは、書籍の詰った棚の前、梯子の上にいる時にこの世から去りたいと願ってさえいる。彼の主人公は思想を発表する以外の行為はほとんどしないが、彼等のその唯一の行為の場所は往々にして古書店の椅子の中である。『ジェローム・コワニャールの意見』一冊は、サン・ジャック街の「聖女カトリーヌ書房」から一歩たりとも離れることがないと云ってよい位である。地方大学の文学部講師ベルジュレ氏も「バイヨー書店」の椅子の中で六年この方「旅行全史」第三十八巻目の前に腰をおろす。すると彼の単調な生活を象徴するかのように二一二頁と二

一三頁とが自然に指の下で開き、いつも同じはじめの数行を彼は読みつつ瞑想にふける[3]。

そして作者の生家は古書店であった。もし彼が自叙伝において、この家業を事実の通りに保ったならば、主人公である「私」は先にあげた作中人物と同じ様な環境で日々を過す少年となるであろう。実際には「少年時代の思い出」四冊にわたっての主人公は古書店の一人息子ではない。町の開業医の息子である。そしてその名前も、本名のアナトール・ティボーには戻らず、ピエール・ノジェールとなった。そしてアナトールがピエールになるとともに、少年の周囲からは大量の書物が姿を消したことになる。この四冊の思い出の中に、従ってこの作家の環境的事実も環境への反応も見ることはできない。もしそれを求めるならば、もう一つの半自叙伝『ジャン・セルヴィアンの願い』によらなければならない。ジャンの生家は製本師であるからである。『ジャン・セルヴィアンの願い』は若くして死んだ母親の遺志によって教養と学歴を身につけた青年が、一種の階級的デラシネとなって、コミューン敗北の混乱の中で横死をとげる物語である。その中でジャンが裕福な学友の家を訪ねた折、その母親から家の職業をたずねられて、父を恥じるという場面がある。彼は、級友の一人が名高い医者の息子であること、そして自分がそうでないことを世の中の不公平だと心に思う。作者は一つの半自叙伝の主人公が願ったことを別の半自叙伝の中で実現したのであろうか。『花咲く日』の巻末で、作者が述べているところによると、彼の子供の頃を知っている人の多くはまだ生きており、父と母もまだ在世中であった中で、思い出の第一冊を世に出すことになったがために行われた改変であったと云う。ピエールが医師ノジェールの一人息子となったこれが本当の事情であろう。その結果として生じた事実との間の距離は作者を自由にしたはずである。そして主人公の少年は書物的環境から自由になったと云える。いわば普通の子供の条件に置かれたことになる。しかし子供の自然な条件の中にも書物は存在する。そして彼の生家は、古書店であることを作品中ではやめたが、河岸通りの本の露店商は残っている。すなわち一歩外へ出ればピエールはアナトールになって少しも差し支えがない。そして彼の「少年時代の思い出」には語り手が様々に介入するが、この語り手は今は大

人になった医師の息子である様子はあまりない。

作者が「仮りの名の下に、若干の情況に修飾を施し」て思い出を述べた結果、本来の書物的環境は姿を消したが、そこにはやはり書物は残り、書物の持っているあらゆる属性を以て子供の「私」と交渉を読ける。そして多すぎる書物とともに暮らす彼の他の主人公の場合とはかなり違った書物との暮しをこの主人公のピエールに見てとることが期待できる。そこに作者はむしろのびのびと書物のことを、そしてしばしば書物の滑稽をも語っているように思うのである。

二

「その頃の私の生活は、二重生活だった。昼間は、自然のままで、平凡で、時に無味乾燥だったが、夜は、超自然的で恐ろしい生活であった[8]。」と書かれている。夜、母さんが掛けぶとんを縁に折り込んで彼を包んでくれた小さな寝台のまわりを、小さな怪物たちが行進する。彼等は鵠の嘴の様な鼻と、逆立った口髭と、尖った腹と、鶏の脛のような脚を持っている。彼等は頬の真中に円い眼のある横顔を現わして、箒や鉄串やギタアや噴霧器その他の何か分からない道具を持って練り歩く。ただ、これらの怪物たちは厚みというものがなく、壁にそって音もなく滑って行くのであった。彼自身は眠らずに見つめている気だが、突然太陽が部屋一杯になり、母さんが笑いながら現われる。しかしピエール＝アナトール少年の世界には超自然の怪奇現象は起らない。近くの版画商の店頭に貼りつけられていた「聖アントワーヌの誘惑」図を、散歩の行き帰りに毎日のように眺め、これらの怪物をピエールはよく見なれていたのである。そして小さい寝台の中に寝る時に、それとは気づかずに再びそれらを見たのであった。ピエールがこの様にして怪物を見たのであったとすれば、これは一種の残像現象であろう。しかし、ここでは、一少年の昼から夜までの残

像であるにとどまらず、幼年時代全体の残像として語られていることに注意したい。「昨日、河岸をぶらつきながら、私はある版画商の店で、ロレーヌ人カロがその美しく固い筆先を試したところの、もはや非常に稀になった幻想戯画集の一つを見出した。」これが子供部屋の怪物たちの実のすみかだったわけである。「私がめくった小画集は私の中に消え失せた世界全体をよみがえらせた。そして私は自分の魂の中を、その真中を愛する影が過ぎて行くところの芳しい塵の如きものが立ち昇って行くのを感じた。(4)」すなわち一種の無意志想起の形を借りて子供時代の残像が浮び出るように語られている。しかしその残像現象は終始画集という書物を通して起っているとも云える。版画商の店で見る絵図に印象を受ける子供がいるが、その子供時代を画集をふとめくることによって想起する作者もまたいるのである。この一篇『怪物たち』は子供時代の特権の様な錯誤が見られるからこそ、思い出の代表として、「少年時代の思い出」の第一作『我が友の書』の冒頭に置かれたのであろう。そしてそれは同時に書物をめぐる思い出の一つともなっていると云えよう。

版画中の怪物たちと夜に再会するピエールから、書物中の記述を以て半ば現実視するピエールへはほんのわずかの距離でしかない。そして彼の知っている唯一の世界であるパリの町そのものをピエールは聖書絵本で解釈する。「この世界について最初の観念を私が受け取ったのは私の古い木版画の聖書の中だった。(5)」と作者は云う。それは優雅な時代錯誤をたたえたオランダの風景画の様な続き絵であった。地上の楽園、ノアの方舟、洪水、ガザの町のサムソン、さらにはイエスがマグダラのマリアの前に現われたまう新約の諸場面などである。ピエールの世界は自分の住むセーヌの河岸通りを中心に、ささやかな円周の内に納っていて、西はトロカデロの丘、東は動物園が世界の果てである。その真中あたりのセーヌ河中でノアの方舟に彼はめぐり合う。それが汲上水道の建物だとは思いもよらない。そして東のはずれの動物園は多少古くなった地上の楽園に外ならない。動物たちの周りに鉄格子のあるのがおかしいが、彼の聖書にある地上の楽園にそっくりなのである。ただしピエールは聖書の事件の続き具合を正しく理解しては

おらず、地上の楽園は動物園だという重要な発見も、いささか自信がなくて発表には至らないのである。「私は、本能的に、自分の説が脆弱だということを感じていたのだ。そして恐らくは心の底で、かくれた暗い意識の奥で、それを大胆にすぎるもの、無謀なこと、詭弁であり、よからぬもの、と判断してさえいたのである。(6)」

この一篇『聖書物語と動物園』は少年ピエールの幸福感、安心感を、絵本におさまる世界として示したものであろう。ピエールが自分の解釈の真実性にいささかの疑念を抱くがために、父に打ち明けられないでいるのが、ここでは語り手の介入と云える。夜の子供部屋の壁に沿って行進する妖怪がその正体を明らかにされているのと同じく、ピエールの楽園現存説も子供らしい絶対性は意外に持たずに描かれている。子供の判断を大胆にしたのはそこに聖書物語があったからであるが、その判断に今一つ自信が持てないのもそれが絵本にもとづくからであろう。この一篇も書物を介して成り立っていると云えるし、いわば書物的判断の小さな戯画である。

ピエールの誤った観念が空想にとどまっている限りは、自分にも他人にも影響は及ぼさない。その空想を実行に移そうと彼がする時、まわりの大人の世界に「迷惑、被害」という形の影響が現われる。「ばらのつぼみ模様の壁紙を張った部屋の本棚の上に、お母さんが時々私に読めと云って渡して下さった緑色の装釘で、版画で飾られた小さな本が幾冊かあった。(7)」その子供読み物が悪影響を及ぼす。〔ピエールは子供読み物の主人公に感動する。そして心を打たれた行為を自分も実行しょうとする。貧しいお百姓たちに親切にしたために夕食によばれた二人の警官は、あいにくあばら屋にはお皿というものがなかったので、シチューをパンの上に乗せて食べた。この話を大変美しく思ったピエールは、昼食時パンの上に羊肉のシチューをのせて食べるのだと云い張り、ソースだらけになる。またある老学者は、ほとんど裸の哀れな小さい孤児を引き取り、自分の書庫で働かせた。その少年は学者から大変あたたかい古着をもらって、少し直して着ていたのである。この点に心を打たれたピエールは押し入れから父の古そうなフロックコートを探し出し、両手をかくすそでと、地面に引きずるすそに対してはさみで少し修正を加える。これが散々に叱ら

れる原因になる。『色々な人生を生きてみること』ピエール自らは「自分を色々な人物にかえ、色々な人生を生きて見たいと思った[8]」わけであり、伯母さんの云うように邪悪な本能を持っていたせいではないが、母さんの云う「有害な猿真似」にはちがいない。「使徒行伝」を読んでもらった彼が地上の楽園にそっくりな動物園の森に隠れ住んで苦行し、聖者になるのだという決心を母さんに打ち明け、彼が有名になって名刺の上に「隠者にして暦の聖人」と書きたいのだと告げるに及んで、母さんはピエールの虚栄心をなげくことになる。(『動物園の隠者の庵』)

これらを一篇の小ドン・キホーテ劇と呼ぶことができるならば、スペインの郷士と同じく、ピエール少年も書物の犠牲者と見ることができる。こうしたピエールの独り遊びを理解せずその度毎に「この子は馬鹿だ」と叫ぶ父さん、溜息をつく母さん、二人ともピエールが学校をおえて職業の選択を迫られた時にも一向にあてにならない。「母は私になら何でもできると思っていたし、父は私が何もできないと決めていたからである。[9]」そこでピエールの頭の中では自分の未来について安易な野心と空想とが混り合う。そして愛読書もまた妄想の種を提供する。

〔学校を終了して、ピエールも学友たちと共に進路を定めねばならなくなった時、就くべき職業について彼はあらぬ空想をたくましくする。学友のフォンタネは何の迷いもなく法科大学、ひいては弁護士を将来の道と定めている。ピエールが自分ほど成功しないのは確実と見て取ってこの学友は彼にも弁護士業をすゝめる。すると弁護士業はピエールの気に入り始める。「私は雄弁が好きであった。私は若い未亡人を腕をふるって弁護するとその夫人が自分に思いをかけるなどと思った。というのは、私はすべてを恋に結びつけていたから。」けれども部屋に戻って考えてみると「生れてこのかた四言と即席には考え出すことができなかった」ことが思い出されこの職業を断念するに至る。アルフレッド・ド・ヴィニー描くところの高邁で物思わしげな士官ならという条件で士官が立派に思えて来る。宣戦が布告され、献身と犠牲で心が一杯の彼は決然と戦場に向う。敵の一隊と遭遇し憎悪もなく戦う。第二の会戦で勲章をもらう。数人の士官と共にある城館に宿泊する。そこには非常に美貌の伯爵夫人がただ一人住んでおり、良人の将軍

は獣の様な男で彼女は良人を愛していない。彼と夫人は互に切なく夢の様に愛し合う……のだが、果して真の軍隊生活はこんなものかと翌朝には早くも疑いが生じる。次には外交官の職が気に入り、ナポリ駐在フランス領事ということにする。そこで青い海のほとりの、ぶどうで蔽われた別荘を借りる。役所をすゝめる友人もあれば農耕をすゝめる友人もある。彼は年鑑を手にして途方に暮れる。どの職業もできないという予感だけはたしかである。ついに画家列伝の編集に加わることになってピエールは苦痛を脱する。『職業の選択』「私はこうした野心を楽しんだ。だがそれはもっぱら哀れな自分を嘲笑うためであった。[10]」と述べている。ところで、この様な愚かな空想を誘発する数々の職業の夢に実は『ジャン・セルヴィアンの願い』で再び出会うのである。製本師の妻であるジャンの母親はひよわなジャンの将来に夢を託し、ロマンスの一節で寝かしつけながら、成長した息子の姿を想像する。「まあそれまでは、私の膝で、立派な弁護士よ、お眠りなさい。」「まあそれまでは、私の膝で、立派な将軍よ、お眠りなさい。」なお外交官については大使の職というのがジャンの家庭教師ツデスコ侯爵のお世辞の中にある。そしてジャンに学歴をつけさせてくれと云い残して若い母は病死する。場面はいわばエレジーであろう。半自叙伝中でエレジーであったものが自叙伝中でパロディ化されて現われる。三人称の作中人物が一人称となった時に、作者との距離は最大におかれたのであろうか。自己中心的で暗い初期作品『ジャン・セルヴィアン』も、愛読書の代表とも云うべきヴィニーの『軍隊生活の屈従と偉大』も、ここに戯画化されて登場する。

しかしピエールは書物によってしか知識を得ないのではない。直接体験は書物的経験と異り、元来現実との不整合などと云った笑劇を生んだりはしない。その直接体験の一つは彼の学校生活であろう。教師と集団教育と競争と試験、これらに対する嫌悪感の表明は「少年時代の思い出」の随所に見られるものである。〔教師の日頃の不公平にいや気がさしたピエールはある春の朝、学校へは足を向けず西の方ブーローニュの森さして歩み続ける。長い通りは都心をはなれひなびて来る。町内では見なれない商売や風俗が目にとまる。野菜作り、乳しぼりの娘達、材木屋、蹄鉄

工……「これらの職人達のすがたは、学校で三ヶ月かかって取り入れる知識よりも更に多くの有用な知識をちょっとの間に私に注ぎこんだ。そして手を使ってする技術やそれにたずさわる人々に対して私が一生涯もちつづけたあの豊かな愛の種子は、恐らくこの日に蒔かれたのであった。[11]」この様にして一日はおわり、彼は顔色が良くなって帰宅する。そして不思議なことに、あんなに憎んだ先生をもう憎く思わなくなっている自分に気づいた。『学校をずるけて』直接体験は常に健全であって、それが大変良きものである時には、もう一つの悪しき直接体験の影響をも消し去る効果を持っている。とこの一篇は語っているのであろう。このささやかな直接体験の物語はただ単に反学校の表われであるばかりではない。書物優先主義の作者ならではのいささか楽天的な直接体験肯定の一篇でもあると思われる。

三

しかし「直接体験」で語られねばならないのは何よりもピエール自身の天職の自覚でこそあったろう。ハイネが手記の中で「恐らく私の中に物を書く望みを起こさせることに貢献した」人として奇人だった叔父のことを語っているのにならい、一人の古物蒐集家の老人を思い起す。

「少年時代の思い出」に後の作家アナトール・フランスの起原を求めるならば、それはこの『ル・ボー小父さん』一篇にであろう。(a) この人こそ彼によれば、幼時から精神的な事物の愛と物を書くことの熱狂とを彼に吹き込んだ人であった。「私が十五の時から私の夢想をもって紙に書きなぐることを負っているのは、恐らく彼にであろう。[12]」〔彼は牢獄の鍵から絞首台、さらにはみいらに至るあらゆる古物の蒐集家で、その目録作りに始終没頭していた。「私は彼に感嘆した。そして私は十才で、戦争に勝利するよりも目録を作る方が一層立派だと思った。」ほこりをかぶり、

くもの糸がはりめぐらされている古物の目録を作るル・ボー小父さんは少年にとって一つの模範であった。「私は人はこれよりも立派な仕事に没頭することができるとは思わなかった。」この目録を印刷に付すことになり、小父さんは校正にかかる。すると「今度は私はそれが世の中で一番立派な仕事であったことを了解した。そして私は感嘆で茫然としていた。」校正する小父さんが手本となって、ピエールもまた何日か校正刷をもちたいと決心するのである。小父さんは静かに死に、目録は公刊されず戸棚の中に残った。古物は売り払われて、その蒐集品の一つ、破壊されたバスティーユ城砦の石に刻んだ記念用の小さなバスティーユをある展覧会で語り手は見かける。『ル・ボー小父さん』

この一篇は古物蒐集を埃とカードと校正刷りに還元し、一方ピエールのうぶな感心ぶりを天職の自覚に拡張してある点におかしさを持っている。このル・ボー小父さんはこの作者にあってはむしろ物品、蔵書にとり巻かれる生活の戯画に属するであろう。そして作者の生家である古書店、河岸通りで親しんだ骨董店の思い出につながるものである。

「少年時代の思い出」には、ル・ボー小父さんと同じく失意の著述家とでも云うべき人たちが見かけられるが、失意の著述家はその秘めたる自尊心と、著作の公表に至らないことが暗示する才能の不足とをともに示すことで戯画化の対象となるのであろう。その典型は『詩の啓示』の女教師ルフォール先生であろう。（ピエール位の年齢の小さい子供を頼むのには女の先生がよいという母さんの意向で彼が通うことになった学校（ここで「少年時代の思い出」の陰の主役である弁護士の息子フォンタネにピエールは出会うが）その最初の一日をピエールは女先生をじっと見つめることで過す。なぜならば騒々しい児童たちとは裏腹に、ルフォール先生はと云えば、青い目は湿り、唇は半ば開かれていて、深く悲しんでいるのが見て取れたからである。あてもなく見つめ、夢想にふけっているらしいルフォール先生の悲しみの原因についてピエールの好奇心がつのる。そんなある日夢遊病者のように教室に入って来た先生は定

規で机をたたき、せき払いをしてから「かわいそうな村娘ジャンヌの物語」を児童を前にして始めるのであった。山の勇敢な牧人とジャンヌは婚約している。『結婚の準備はすべて出来上ったのに、彼女は憂うつに侵されて蒼白となり、婚約者に別れを告げて死んで行く。墓が彼女の結婚の床となり、結婚式のために鳴ったはずの村の鐘は彼女の葬式のために鳴った。このように先生が微かな声で語る物語にピエールは感動してすすり泣く、これを見た先生は喜んでピエールをそばに呼んで云う。「ピエール・ノジエールさん、あなたは泣きましたね。さあ名誉の十字架をあげましょう。この詩を作ったのは私ですよ。私はそれと同様に美しい詩で一杯になった大きな帖面を持っています。でもまだそれを印刷する出版社が見つかりません。それはほんとに恐るべきこと『信じ難いことではありませんか。[13]」ピエールがこれを本当の話であると信じ、先生の悲しみの原因がジャンヌを愛していたからだと分かって満足だと告げるとこれが先生の気に障る。「ジャンヌは作り話です。あなたはお馬鹿ですね。」とピエールに与えたばかりのほう美の十字架をとり上げる。家に帰って「作り話」とは何かを母さんにたずねると、それは「嘘のこと」だと教えられてピエールは落胆する。『詩の啓示』「作品」であることを理解されないで怒る大人気のない先生と、逆にそれが「作品」であることを知って悲しむピエールの滑稽がこの一篇の狙いであろう。

大人が自分の著作に野心を抱くのはしかし不自然なことではない。子供であるピエールの頭の中に同じことが起れば この行為は一つの笑劇となるはずである。そして思い上りの笑劇は当然教訓という形で終らねばならない。

〔書店、古物店、版画商の店々の陳列窓は、それを眺める子供の心をもひきつけずにはいない。もっとも友人の現実主義者フォンタネとピエールの間には趣味の甚しい相違も存在するが、書物から武器に至る豊富な品々に親しんだ二人は無邪気な計画に次々ととりかかる。ついに総ての細目を備えた五〇巻の「フランス史」を作るという最も立派な計画が生れ、宿題を放棄して直ちにとりかかることとなる。ところでその第一章は伝説の王トゥトボシュス王にあてられることになる。この謎の巨人王で以てフランス史をはじめることに執着するピエールと困難を飛びこすことを

主張するフォンタネとの間にあって「フランス史」はトゥトボシュス王の手前で止ってしまい動き出さない。そして語り手は反省する。「ああ！私は私の生涯においてこの本と巨人との出来事を幾度くり返したことだろう！(14)」一方フォンタネはありとあらゆるトゥトボシュス王の脚の間をくぐり抜けて、弁護士、団体の指導者、代議士へと公生活を駈け抜けつつある。自分にはとてもできることではない、と語り手は結ぶ。『トゥトボシュス王』トゥトボシュス王とは当時遺骨が発見されたと信じられて話題となったフランス古代の巨人王。一方「フランス史」は企画倒れとなった「大革命辞典」の思い出を戯画化したものであろうとされる。おそらくは『カンディド』のトゥンデル・テン・トロンク城と同じく音の響きのおかしさが値打ちのトゥトボシュス王をめぐって「少年時代の思い出」全篇のライトモチーフであるピエールとフォンタネの対比を、反省的考察へと転換したものとしてこの一篇を見ることができよう。そして子供の向う見ずな計画の極端な例が書物を作ることに見出されている点、これも著作することの戯画と云えるだろう。

『天才は不正に委ねられる』の一篇もまた後半はそうである。〔自分の名前が書けるようにと母さんが文字の書き方を一通り教えてくれた。そこで一冊の本をあらわすという野心がピエールに生れる。それは神学上道徳上の小論文であって、「神とは何ぞ……」で始まる。まずここまでに間違いはないかとピエールはそれを母さんに差し出す。母さんは、それでよいが句の終りに疑問符が必要だと答える。「神とは何ぞ」とたずねているのだから疑問符を置かなければいけないと母さんは教えてくれたのである。「僕はそれをたずねてはいません。僕はそれを知っています。」とピエールは答え、無知の印のように思われたその疑問符をおくことを絶対に拒絶する。そして語り手の反省が書き記される。「私はその時からすっかり変ってしまった。私は疑問符をおく習慣になっている場所には皆それを置くのにもう反対しない。私は自分の書いたあらゆる句の終り、自分が云ったあらゆる言葉の終り、自分が考えたあらゆる事柄の終りに、非常に大きくその疑問符をつける気にさえなってしまった。私のお母さんは、今生きていらっしゃっ

たならば、多分私に対して、今は私があまり疑問符を置きすぎると仰しゃるであろう[15]。」『天才は不正に委ねられる』これこそ後にやって来る考察を導くための作り話であるかも知れない。(b) 子供の愚かな考えと語り手の反省、その両要素の間の飛躍的転換は『トゥトボシュス王』の場合に近い。これがもし反省だとすれば擬似的な反省にすぎないであろう。しかし反省としてはたしかに擬似的かも知れないが、「懐疑家」アナトール・フランス自身の要約としてはこれ以上単純化できないのではないか。そして「懐疑」を「疑問符」によって視覚化したことが、結びの一句を物語りの場面へと引き戻す。先の『トゥトボシュス王』もこの一篇も、著作するという典型的な大人の行為を子供が目論む、その模倣のおかしさもあれば、この行為の含む自負、虚栄、自己満足、落胆などの諸相も反映していると云えよう。

「少年時代の思い出」には、しかし、この様な「物を書くこと」の戯画しか存在しないのではない。「物を書いてはいけない」とピエールに正面切って忠告する人がいるのである。作中人物として最も高位にある思索家で時に毒舌家のデュボワさん、この人が死ぬ前に、「物を書いてはいけない」とピエールに告げるのである。ピエールが今たずさわっている様な芸術家の略伝や考古学辞典の項目の執筆ぐらいはよいが、と前置きして、「友よ、作者がその精神の特徴を出し、名をあらわし、自己を明したり、吐露したりして、つまり、詩や小説や哲学や歴史で名を挙げようと努める一切の文学上の作物の場合は事情が異る。[16]」才能があると世間に認められるようものなら、静かさと平安は中傷によって乱され、宝の中で最も貴い休息ももはや望めない。「物を書いてはいけない」とデュボワさんは忠告するのである。これが死の前日にたまたま訪れたデュボワさんの残した言葉であった。このデュボワさんの言葉が才能についての知恵を示すものであるとすれば、ピエールの母さんには一人息子の才能についての熱い思いがある。なぜなら、中庭を去って行くデュボワさんの姿を見送りながら、母さんはピエールの頸を接吻して耳もとに囁いたからである。「お書き、お前には才能があるでしょう。」

四

ピエールが書物と現実を混同する読者となろうが、また身の程をわきまえずに著作を夢見ようが、そこにある書物は書かれたもの、または書かれるものとしての書物である。すなわち書物の内容が問題となっている。しかし書物はまた学校においては不可解なテキストであり、ただの表題であり、河岸の古本屋の商品であり、さらに紙である。そして常に文学の比喩でもあり続ける。この様に個々の内容を去って身軽となった本は、なお様々の属性で以て子供の狭い生活とも色々に結びつく。

学校におけるピエールと書物の接触は、教科書の勉強という形で大いに彼を困らせるのである。〔ピエールは教室でフランスの最初の王たちに関する詩文を暗誦させられる。暗誦の途中でピエールが行きづまると先生は正しい文を教えてくれたあと、忘れてしまったのなら、韻律を守りさえすれば作り直せばよいとして、リュテースがアッティラから救われたというくだりをたちどころに三通りにも云い変えてみせ、ピエールを感服させる。『ジュバル師の威光』その時の暗誦の有様を作者は次の様に書いている。

Pharamondfutdit-onlepremierdecesrois
QueleesFrancesdanslaGauleontmissurlepavois
ClodionprendCambraipuisrègneMérovée……(17)

棒読みの詩文は内容の無理解を伴っていてメロヴェが支配していた時代にリュテースが救われたことまではピエールは思い出すが、彼はこのリュテースを年寄りの女であると思っているので、この事件について少ししか興味がわかない。もしそう誤解していても暗誦は成り立つのである。ピエールは悪い点をもらうが、それは暗誦で行きづまった

からで、内容の理解の度合いには関係がない。この一篇は子供と教科書の交渉を暗誦という極端な形で戯画化している。

生徒の方は詩の各行をあたかも一続きの言葉であるかのように唱えるが、一方先生の方は叙事文の口述を寸断するのである。〔ショタル先生は現実生活では臆病だが、古代の戦争は大好きなのである。レオニダスの勇戦、サラミィヌの海戦、ファルサルの戦い、ウァールスの軍団の戦闘を語って好戦的な熱情を教壇で発揮する。しかし先生は騒々しい生徒たちを相手に同じ勇壮な語調で罰課を振り当てながら叙事文を口授するのである。その混合体の雄弁にピエールは笑いすぎて気が遠くなってしまう。『デシュス・ミュスの最後の言葉』〕その言葉は次の様に小言で寸断される。

「デシュス・ミュスは最後に戦友の方をかえり見て云った。若しもあなたたちがより良く沈黙を守らないならば、私はあなたたちを総謹慎に処しましょう。私は祖国のために不滅の中へはいって行く。深淵が私を待ち受けている。私は公の幸福のために死のうとしている。フォンタネさん、あなたは私に文法の十頁を写して下さい。永遠の都の永遠の守護者ジュピテル・カピトリヌュスは聡明にもかくの如く決心した。ノジェールさん、もしもあなたが……[10]」

ラブレーには有名な酔っぱらいたちの雑談がある。宴席で何組もの雑談が進行するのを無選別に記録した形をとっている。しかしショタル先生の場合はただ一人で二通りの発言を同時に進行させるのである。職業上やむなく起った混合であって職業の戯画と云えようが、珍奇な混合文体がピエールを笑いで失神させない時はショタル先生は彼の心を感激で満たす。「老説教者のようなくぐもり声で、彼が静かに『ローマ軍の敗残兵は夜陰に乗じてカニュジウムに達した』という文句を述べる度に、私は月の光を浴びて裸の野原の中の墓に緑取られた道の上を、血汐と埃とで汚れ、凹んだ兜と色さめへし曲げられた鎧と折れた剣とを持った、蒼白の顔が黙って過ぎて行くのを見た。そして半ばかすみ緩かに消え失せるこの幻影は非常に重々しく、傷ましく、高邁であったので、私の心はそのために胸の中で苦

痛と賛嘆とによって躍り上った程であった。[19]」

教室でのこの様なテキストをめぐる異変は、従って学校授業の中での感激を戯画で以て包んだものであろう。古典の「鑑賞」と現実との混合は、それを思い出の中に語りこめるいわば一つのスタイルであった。ピエールは学校の帰途、町の通りをたどりながら詩句を小声で暗誦する。すると彼は物を運ぶ小僧とぶつかり、頬のところで荷車を引く馬の息を感じたりするのであったが、「現実は決して私の夢想を傷つけなかった」と云っている。「ある夕方私は一人の栗商人のランタンでアンティゴーヌの詩を読んだ。そして私は二十五年後になって、

おお墓よ！　おお　結婚の床よ！……

というこの詩句を、紙袋の中に息を吹き込んでいるオーヴェルニュ人を再び見ることなしには、また私の側に栗を焼く鍋の暖かさを感じることなしには思い出すことはできない[20]。」これらは児童と学校教科書の関係に還元して表わされた古典の礼賛と云えよう。

学校生徒ピエールと教科書の関係は暗誦と口述筆記だけではない。古典との出会いはまた、テキストより先に表題との出会いとして始まる。「中学校に入ったばかりの学期はじめ、先生は購入すべき教科書の表題を列挙する。その表は彼の初めて聞く「エステル」と「アタリー」という名で終る。「たちまち、私の眼前に、心地よい霧の様なものに包まれて、二人の優しい女の姿がぼんやりと現われた。[21]」それは二人の美しい村娘であって、矢車菊とひなげしの咲く麦畠、煙の上る農家、羊飼い、村人たちまでぼんやりと見えて来る。彼はエステルとアタリーの物語をはやく知りたくてたまらない。たずねた母さんは、それは別々の二つの芝居で、その上韻文で書かれているという不愉快な事実を教えてくれる。ピエールはこれを信じようとせず、羊飼いエステルと可愛い女乞食アタリーの物語りを心の中でますます発展させながら、教科書の到着を今やおそしと待ちかまえる。半月の後に本当に教科書を受け取ってみれば母さんの云ったことにまちがいはなく、夢破れたピエールは本を閉じて、もう二度と決して開くまいと心に誓う。

彼はエステルの祈りを覚えるのを拒んだため大量の罰を食う『中学生』これに続く一文は大のラシーヌ礼賛家アナトール・フランスの、ほぼ手放しと云ってもよいラシーヌ賛美である。教科書への愚かな反感、罰を科す先生、こうした思い出の一場景を通してラシーヌと作者との浅からぬ付き合いが語られる。書物の表題がその内容を空想させるという一つの事実と中学生の勝手な思い込みとが組み合わされて、古典との出会いを描いた風変りな一篇が生れているのである。

作者の父が実際は古書店主だったことはここで問題にしないとしても、作中のピエールも、書物には、殊に露店の古書という形で早くから親しんで育った様に描かれている。作者が生れ育った界わい、すなわちルーヴルやテュイルリーに向い合って書店、古物屋、版画商の店が並ぶセーヌの河岸通りについて「そこには樹木と書物とがあり、女達がそこを通るので、それは世界中で最も美しい所である。[22]」と云っている。しかし、この河岸通りの石の手すりに並べられた箱の中で売られている古本はまた紙の推積でもある。それらの本の箱は「太陽と雨とが永却を目指して書かれた頁を徐ろに蝕んで行く安古本の箱[23]」ともなるのである。これらの古い本はまだ小さいピエールに「事物の変遷と虚無[24]」とについて深い自覚を得させたと語り手は云う。移り行く成功と一時の名声の空しさという知恵の教訓を見出したというのである。この老成した自覚が少年にふさわしくないのは事実であるが、長年月にわたって同じ場所で同じものを目にしつつ暮したこの作者の無時間的感慨なのであろう。

この老成的少年の不自然を容認するとしても、これはさらに子供には不似合いな比喩的な思考でもあろう。紙から成る書物の有限性が書かれたものの有限性を示し、そこに悲哀を感じるという。書物の属性をたどって転義を見出す、この操作が少年にも分ち与えられている点にむしろ軽い滑稽が生まれてさえいると云うべきであろう。「河岸をぶらついて古本漁りをする以上に平和な楽しみを私は知らない[25]。」という述懐もそれが語り手の述懐である限り少しの不自然さも感じないのであって、露店の古本の箱は、群をなしている死んだ人々と話をかわすことができる古人

の極楽浄土、この世にいながら見出すシャンゼリゼだという比喩とともに、この思い出集に特有な一種の半心的風景であると云える。その様な風景の魅力を小さいピエールもまた感じ取るかの如くに作者は語っているのである。そしてその半心的風景の主役は、河岸の石の手すりに並び「書物の有限性」をそのまゝ風景にした様な露天の古本の箱店であろう。

「私は一度もモリエールやラシーヌの初版を河岸で発見したことはない[66]。」と彼は云っている。堀出し物などという「実益」はないのである。そして露天の箱店の持主の側にも実益に関心のない人を作者はことさらの様に選んでいる。「商売は彼の関心事の最小のものであったと、私は断言することができる[67]」と書かれている古本屋のドバさんは語り手が子供の頃からの識り合いである。それは少しも繁盛していない店であった。「彼の露店は、人の住み捨てた果樹園のように、自然に還りつつあった。そこでは木の葉の幾枚かが本の紙と混り、空を飛ぶ鳥が（……）一物を落してよこした。プラタナスの落実を馬の糧袋からこぼれ落ちた燕麦の粒と一緒に河岸の上に捲き上げる秋の風が、いつかは、古本も古本屋もセーヌ河の中へ吹き飛ばしはしないかと気遣われる位だった[68]。」売り手も商品もともに同じ場所で動かず、風と雨と太陽にさらされる……という商売はこれに限ったことではないかも知れない。その観念からしてそうなることが最も意外な「書物」が「自然に還る」ことをよぎなくされている所にこの情景の特徴はあるのではないか。

もっともドバさんはこの露店の箱店をはなれれば少しも無気力な人ではない。「ドバさんは通常同一の人間が企てないような数多くのそして非常に雑多な仕事をやってのけた[69]」のであった。彼はあらゆることをやるが自分の職業だけをしないのである。煖炉職人にもなれば溺れた人の介抱もし、馬をとりおさえ、呼鈴をとりつけ、歌い手となって礼拝堂で晩禱も歌い、逃げた鳥を取り戻す。この様にしてある日、ピエールはドバさんと、逃げたおおむを追って屋根の上の活劇を演じることになる。親切好きな人の散漫な生活がそこに描かれている。そして結局は古本屋として

の不適性を証明していることになるだろう。しかしこの商売そのものが現代のパリの真中で生きのびて行くとは作者にはとても思えなかったのである。「恐らく、河岸から追い払われて、古本屋は二度と帰って来ないであろう。彼等の露店は文明進歩の代償であろう[30]。」いわば作者は社会的、歴史的な自然淘汰を悲しんでいるわけである。消えて行く南仏の丘の上の風車を惜んだドーデと同じく、本の箱店の主人ドバさんはパリ生れの作者によって惜まれているのである。

もっともこの作者は好んで職業上の不適性状態を描いた。やはり河岸通りで、青色めがねと鉱物標本を並べていためがね屋が自殺する話、主題の規模が雄大すぎて結局は一生絵に出来ぬまゝ病死する画家など。しかし彼は彼の父その人をも職業への不適性を以て評しているのである。「少しも商売の頭がなかった父は、その本を売るよりも自分で読むのに向いていた[31]。」と『花咲く日』の巻末で述べている。彼にあっては職業上の不適性は一種の高貴の印となっていると思われる。そして本業となると陰気で無気力なドバさんは「事物の変遷と虚無」を古本の露店から学び取るにはなくてはならない「適性」の人物として描かれているのであろう。

ただ我々はピエールの中に、書物そのものが現実であったであろう作者の少年時代を見出すことはできない。それはもし描かれればボナールともコワニャールともちがう書物的生活の描写となったことであろう。作者は恐らく古典主義者として自叙伝においても実は個人は控え目にし一般的抽象的であることを望んだのであったろう。そして父の古書店が専門に扱っていた大革命は、ピエールの祖父母の世代の人々の思い出話として作品中に現われている。これがこの自叙伝に語られた作者自身の少年時代の思い出だと評する人がある。

五

作者は書店主としての父を語って述べている。「全く形而上学的な彼の知性は、物の外観を尊重せず、彼は本をその外形のために愛することはなく、愛書家を嫌っていた[33]。」即ち彼の父は本の属性の半分のみを専ら愛し、他の属性を尊重しなかったと云うことになる。その書物の属性のすべてがピエールの生活、語り手の思い出に入りこんでいる。しかしそこに見出されるのはやはり文学以前のアナトール・フランスであるから、読書家でも、作家でも、愛書家でもまだない。子供が子供という条件で書物と接すればそのどれにも似て、そのことが「少年時代の思い出」のいくつかの章を独特なものにしているのである。

しかし彼は文学の時代に育ったことをここに思い起すべきであろう。なぜなら自分の誕生の日を語った一篇で「カトリック教徒で王党のシャトーブリアンとナポレオン党で共和主義者で自由思想家のベランジェ、この二つの表象の下に私が生まれたのであった[33]」と述べているからである。作家が時代を代表し得たのである。「少年時代の思い出」のピエールが子供であるにしても、その様な時代は子供と書物の関係に反映する。少くとも作者が子供と書物の交渉の場面として描くべきであると思う事柄に反映する。ピエール・ノジェールと作者アナトール・フランスとの間には過去と現在という距離以外にも距離が保たれていて、自己の否定すら為されていると評される。自嘲が専ら自己の否定のみを目的とするとは云えないが、自嘲もこの「少年時代の思い出」の基調である。そして作者自身述べている。「私は生涯を通じて嘲るのが好きであったけれども、自分自身を嘲るほど残酷にまた楽しんで人を嘲ったことはなかった。[34]」そしてそれは彼が少年時代から生涯もち続けたという「物事の滑稽なところを見るという天分[35]」を、自己を対象から除外せずに発揮したものに外ならないであろう。それも自己の否定であるとするならば、彼の「自己」の一部にはたしかに書物的生活が存在し、それをも滑稽と見て嘲笑うことがあったとしても不思議ではない。ただそれが少年としての自己であるならば、この作品のもう一つの基調である軽い陽気さを生み出すことになるのである。しかし「少年時代の自己」の一部が書物によって成り立っているのは、それが後の作家アナトール・フランスで

あるからだけであろうか。書物の様に多くの属性を具えたものと子供が早くから接し、その属性のすべてと共に生きた時代の「思い出」でこれはたいのであろうか。

註(1) La Rôtisserie de la Reine Pédauque. O. C. Tome VIII (1926) p. 72.
(2) L'Orme du mail. O. C. Tome XI (1927) p. 138.
(3) Le Petit Pierre. O. C. Tome XXIII (1932) p. 18.
(4) Anatole France, Oeuvres I (Bibliothèque de La Pléiade (1984)). p. 438-439.
(5) Pierre Nozière. O. C. Tome X (1927). p. 265.
(6) ibid. p. 272.
(7) Le Petit Pierre. O. C. Tome XXIII (1932). p. 219.
(8) ibid. p. 221.
(9) La Vie en fleur. O. C. XXIII. p. 510.
(10) ibid. p. 438.
(11) ibid. p. 323-324.
(12) Le hivre de mon ami. Oeuvres I (Bibl. de La Pléiade.) p. 467.
(13) ibid. p. 491.
(14) ibid. p. 495.
(15) Le Petit Pierre. O. C. Tome XXIII (1932). p. 38-39.
(16) La Vie en fleur. O. C. Tome XXIII (1932). p. 544.
(17) Le Livre de mon ami. Oeuvres I (Bibl. de La Pléiade). p. 496
(18) ibid. p. 506.
(19) ibid. p. 507.
(20) ibid. p. 513.
(21) Le Petit Pierre. O. C. Tome XXIII (1932). p. 269.

㉒ Le Livre de mon ami. Oeuvres I. (Bibl. de La Pléiade') p. 493.
㉓ Les Opinions de M. Jérôme Coignard. O. C. Tome VIII (1926). p. 310.
㉔ Le Livre de mon ami. Oeuvres I (Bibl. de La Pléiade) p. 510.
㉕ Pierre Nozière. O. C. Tome X (1927). p. 337.
㉖ ibid. p. 338.
㉗ ibid. p. 332–333.
㉘ ibid. p. 332.
㉙ ibid. p. 333.
㉚ ibid. p. 337.
㉛ La Vie en fleur. O. C. Tome XXIII (1932). p. 562.
㉜ ibid. p. 562.
㉝ Le Petit Pierre. O. C. Tome XXIII (1932). p. 13.
㉞ La Vie en fleur. O. C. Tome XXIII (1932). p. 438.
㉟ ibid. p. 413.
(a) Jacques Roujon: La Vie et les Opinions d'Anatole France, (Librairie Plon. 1925) p. 81.
(b) Elie Aubouin: Les Genres du risible. (Ofep. Marseille). 1948. p. 85.

テキスト＝Œuvres complètes illustrées de Anafole France. Calmann-Lévy Editeurs.
Anatole France: Oeuvres I. (Bibliothèque de La Pléiade). 1984.

——文学部教授——